



News Letter no. 29

# ニュース・レター

日本図書館協会児童青少年委員会 2022.7

ISSN 2188-6067

## 追悼 松岡享子さん

松岡享子さん追悼号にあたって

東京子ども図書館名誉理事長松岡享子さんが2022年1月25日に永眠されました。

松岡さんには、児童図書館員養成専門講座の講師を1回目の開催から長年にわたり務めて頂きました。第1回(1980年)は「図書選択と評価」と「貸出・フロアワーク・ストーリーテリング」でした。2019年の第39回では、東京子ども図書館を会場に「児童図書館員の仕事」をお話して頂きました。ほぼ毎年の37回に及びました。心より感謝いたします。

児童青少年委員会は、1980年に日本図書館協会の一委員会として発足致しました。委員会活動の一番大きな柱は児童図書館員養成専門講座の開催です。日本の児童サービスの発展のためには、児童図書館員の向上が必須であると考えた小河内芳子さんや中多泰子さんらが開催に向けた努力をされました。同じく児童図書館員の養成が大切だと考えられていた松岡さんは多忙のなかでも講師をお引き受け頂きました。

この度、松岡さんの講座を受講された7人の方々(小関知子さん<第1期・1980年>、市川純子さん<第12期・1992年>、二井治美さん<第17期・1997年>、前原有美子さん<第18期・1997年>、村上弘美さん<第26期・2006年>、琴寄紀子さん<第27期・2007年>、浅沼さゆ子さん<第28期・2008年>)に「松岡さんとの思い出」を中心に「学んだこと」「残したこと」「伝えなかったこと」を寄稿頂きました。松岡さんが語られた一つひとつの言葉が重さを持ち、今でも受講生に強く残っていることがわかります。松岡さんのお考えは深く広く浸透しています。寄稿して頂いたおひとは、「先生から教わったことをしっかり受け継ぎ、次の世代に伝えていくことを改めてここに誓います。」と結んでくれました。松岡享子さん、ありがとうございました。

※講座名について

第1回から第31回(2011年)までは「児童図書館養成講座」でしたが、第32回からは「児童図書館員養成専門講座」と名称が変更されています。

## 松岡享子さんと児童図書館員養成専門講座

| 回数 | 年    | 月日              | 内容  |
|----|------|-----------------|---|
| 1  | 1980 | 2月21日           | 図書選択と評価   |
|    |      | 7月7日            | 貸出・フロアーワーク・ストーリーテリング                                    |
| 2  | 1981 | 9月4日            | 奉仕活動(講義と演習)   |
| 3  | 1982 | 7月1日            | 子どもに対する奉仕活動   |
| 4  | 1983 | 7月2日            | 子どもに対する奉仕活動   |
| 5  | 1984 | 7月4日            | 児童奉仕の現場での諸問題  |
| 6  | 1985 |                 | (担当されていない。)   |
|    | 1986 |                 | ※IFLA、IBBY 東京大会で中止                                      |
| 7  | 1987 | 9月28日<br>～10月1日 | ①目録②選書③書評④ブックトーク⑤ストーリーテリングを<br>松岡享子、荒井督子、川崎登美子、村松壮子で担当。 |
| 8  | 1988 | 9月28日           | 書評を書く   |
| 9  | 1989 | 9月27日           | 書評を書く   |
| 10 | 1990 | 9月29日           | 書評を書く   |
| 11 | 1991 | 10月1日           | ストーリーテリング、ブックトーク  |
| 12 | 1992 | 10月1日           | 書評を書く   |
| 13 | 1993 | 10月19日          | 書評を書く   |
| 14 | 1994 | 4月12日           | 書評を書く   |
| 15 | 1995 | 10月2日           | ストーリーテリング、ブックトーク  |
| 16 | 1996 | 9月30日           | ストーリーテリング、ブックトーク  |
| 17 | 1997 | 9月29日           | ブックトーク  |
| 18 | 1998 | 11月27日          | ブックトーク  |
| 19 | 1999 | 9月30日           | ブックトーク  |
| 20 | 2000 |                 | (担当されていない。)   |
| 21 | 2001 | 9月27日           | 書評  |
| 22 | 2002 | 9月26日           | 書評  |
| 23 | 2003 | 9月25日           | 書評  |
| 24 | 2004 | 9月30日           | 書評  |
| 25 | 2005 | 9月29日           | 書評  |
| 26 | 2006 | 9月25日           | 本の紹介文を書く  |
| 27 | 2007 | 6月25日           | 児童図書館員という仕事   |

|    |      |       |                       |
|----|------|-------|-----------------------|
| 28 | 2008 | 7月5日  | 昔話の意義                 |
| 29 | 2009 | 7月2日  | 子どもの文学の基本としての昔話       |
| 30 | 2010 | 7月1日  | 子どもの文学の基本としての昔話       |
| 31 | 2011 | 6月30日 | 子どもの文学の基本としての昔話       |
| 32 | 2012 | 6月28日 | 東京子ども図書館見学&松岡享子さんとの懇談 |
| 33 | 2013 | 6月27日 | 子どもの文学の基本としての昔話       |
| 34 | 2014 | 6月26日 | 児童図書館員の仕事             |
| 35 | 2015 | 6月25日 | 児童図書館員の仕事             |
| 36 | 2016 | 6月30日 | 児童図書館員の仕事 東京子ども図書館見学  |
| 37 | 2017 | 6月29日 | 児童図書館員の仕事 東京子ども図書館見学  |
| 38 | 2018 | 6月28日 | 児童図書館員の仕事 東京子ども図書館見学  |
| 39 | 2019 | 6月27日 | 児童図書館員の仕事 東京子ども図書館見学  |



## 亥年の先生

小関 知子(元・三鷹市立図書館) 第1期 1980年

1980年、第一回児童図書館員養成講座が開催された。70年代の公共図書館隆盛の気運の中で、児童サービスを目指す者たちが、待ち望んだ講座だった。応募要項は、「5年以上の実務経験を持ち、将来、児童サービスの現場で、指導者、助言者として活躍できる人」とあった。全国規模の研修で、30名の定員に対し96名の応募があり、32名が受講生に決まった。10年以上のベテランの方も多く、32歳の私は「若手」に属した。松岡先生は一回り上の44歳だった。前・後期併せて2週間に及ぶ講座で、各分野で第一線で活躍している、最高の講師陣を迎え、連日熱気に満ちた研修だった。一コマ3時間の授業で、28コマのうち、松岡先生は4コマ、12時間以上を担当した。前期で、児童図書館運営の要である「図書の選択と評価」後期で「フロアワーク」「ストーリーテリング」について、熱血指導をしてくださり、児童図書館員としてのバックボーンとなる知見を、惜しみなく与えてくださった。

「図書の選択と評価」では、松岡先生が、アメリカのボルチモア図書館で働いていた時のマニュアルを引用し、「選書は、新しく入れる時だけでなく、評価し続けること。入り口から出口までの流れを見届けること。蔵書の基本となる本は買い替え、常に書架にあるよう心を配ること」「リプレースメントリスト」という概念を教えてくださいました。このことは、東京子ども図書館の事業「基本蔵書目録」刊行と、長期品切れ図書の復刊キャンペーンへとつながっている。

「ストーリーテリング」では、32名の受講生すべてが語る時間は持てず、語り手は数人にしぼられ、

多くは 1 冊ブックトークにまわった。印象に残っているのは、山口県の方が語られた「水底の主ニッカーマン」(出典『三本の金の髪の毛』ほるぷ出版)で、松岡先生訳のチェコスロバキアの昔話。当時、おはなし会が、どんどん低年齢化していた折、「語り手も聞き手も選ぶ難しい話を、よくなさったわね。よい聞き手に恵まれるとよいわね。」と絶賛なされた。

私は 1 冊ブックトークに『とぶ船』を選んだ。(ヒルダ・ルイス作 石井桃子訳 岩波書店)私事だが、前期の二月は父の看病と保育園の送迎で講座終了後、後ろ髪を引かれる思いで飛んで帰る日々だった。三月に父を看取り、喪失感の中で、後期の課題の準備をしていた。

ふしぎな老人から買った、イノシシの頭が船首に着いた、バイキング船の模型は、持ち主を望みの場所に運ぶ、空とぶ船だった——この物語には、主人公たちの母親の入院という背景があり、子どもたちが時空を越えて冒険する展開が、私をファンタジーの世界へ導いてくれた。

松岡先生と私は共に亥年。先生は歌舞伎もお好きで、その後も亥年が話題になると、「五段目で運のいいのは猪ばかり」と川柳を引いて笑い合ったことがなつかしく思い出される。



#### 松岡享子先生の言葉

市川 純子(元・横浜市立図書館) 第 12 期 1992 年

本棚の一番上の右端に、リボンで結んだ二冊のファイルがあります。それは 1992 年度・第 12 期「児童図書館員養成講座」(当時)のノートと資料を挟み込んだ分厚いファイルです。講座を終了して時間が経過しても折にふれて取り出すうちに、すぐ見つけられるその場所がいつしか定位置になっていました。

改めてノートを確認すると、講座後期の 10 月 1 日に松岡先生の書評の講義がありました。絵本と、昔話・児童文学関連の一般向けの本について、私たち受講生が事前課題で提出した「書評」を講評して、先生は厳しくコメントされました。やや萎縮気味に、受講生から「書評をきちんと学んだことがなくて」「経験の浅い私たちには難しい」といった声が上がると、先生はきっぱりと話されました。「評価が下せないのなら、その本に何が書かれているか、何について書かれたものかをきちんと書くことはできるでしょう。良いものは書けずとも、役に立つものは誰にでも書けるはず。最初から 100 点や 120 点とはとれないが、20 点でもない。本の外側だけしか説明できなくても、その本の姿を紹介することはできるはずです。」必死で書き取った私のメモには、二重線が引いてあります。先生の声と共に、今でも私の中に響いている、忘れられない言葉です。

さらに松岡先生は、「自分の見方を真ん中にすえる」「自分の今あるところを座標軸に進んでいく」とも話されました。「私は間違っているかもしれないが、知識もバックグラウンドもないが、その本を読んで私が何を考えたのか、私の今あるところを表明することはできる。」こうした松岡先生の言葉から、先入観にとらわれず、自分の目で見て本質をつかもうと努力することが一冊の本の評価の基本で

あり、それが図書館の選書という仕事につながっていくのだということを学びました。そして先生は、「図書館員の強みは目の前に読者がいることですよ。児童図書館員は、子どもが本をどう読んでいるのかを、きちんとキャッチしておくことが大事です。」と励ましてくださったのです。

今春、私は横浜市立図書館の司書としての 36 年間にピリオドを打ちました。最後に若い職員に向けて話をする機会を得て、この松岡先生の言葉を伝えました。すべての仕事の基本となった大切な言葉だと考えたからです。

松岡先生に教えていただいた事柄は数多くありますが、この講座で先生が話された声、言葉の調子、全体のリズム、そしてその時の先生の表情、すべてがくっきりと記憶に残る宝物です。松岡先生、本当にありがとうございました。



子ども達に本を手渡すことの重み—松岡享子さんから教わったこと—

二井 治美(草津市立図書館) 第 17 期 1997 年

私が松岡享子さんと初めて出会ったのは、今から 25 年前の 1997 年に受講した第 17 回児童図書館員養成講座でした。受講の目的は、自身の司書 10 年目の節目に司書としての力量を総合的に点検したかったこと、養成講座の講師陣がとても魅力的だったので、10 年間頑張った自分へのごほうびにしたかったことからでした。錚々たる講師陣の中でも、新採の頃からずっと児童サービス担当だった私にとって、松岡享子さんにお会いできることはとても楽しみでした。直接ご指導いただける絶好の機会に恵まれた私は、はりきって事前課題にも取り組みました。

当時、〈児童奉仕の実際③ブックトーク〉の講師を担当して下さっていた松岡先生には、ブックトークの基礎をしっかりと叩き込んでいただきました。それは、現在の私の大きな糧となり、礎となっています。受講生が事前課題で取り組んだブックトークの試演をしっかりと見てくださった後、的確なアドバイスを一人ひとりに丁寧にしてくださいました。

受講生へのアドバイスの中で、ひときわ凜とした姿で瞳をまっすぐに見据えて真剣に語られたことがあります。それは、受講生の一人が〈錯覚〉をテーマにしたブックトークで、『さかさまかさ』(福音館書店)や『作って遊べるマジック』(集英社)、『さぎ師たちの空』(ポプラ社)などと一緒に『日本の歴史』(ほるぷ出版)、『かさをささないシランさん』(理論社)など戦争の本を 2 冊取り上げて試演をした時のことでした。

当時の私のノートには、こう記されています。

「原爆やナチの戦争を〈錯覚〉というテーマで取り上げることは、気分、レベルの層の差があります。どのレベルでとらえるのか。本当にまじめに取り組まなければならないことと、茶化してもよいことの違いを見極めないと、一番大事なものの重みが軽いものとして伝わってしまいます。」

とても厳しい表情で、けれども怒るというのではなく、しっかりと伝えたいという思いで言葉を選びながらゆっくりと語られる姿に、試演をした彼女だけでなく、受講生全員が、ビシッと姿勢を正して、松岡先生の発する一言ひとことに聞き入りました。私達にとって「児童図書館員として、子どもに本を手渡すことの重み」を胸に深く刻み込んだ大切な時間となりました。

あれから 25 年、今では、ブックトークの研修講師という立場でみなさんの前でお話する機会をいただくようになりましたが、当時の松岡先生のまっすぐな瞳と凛としたお姿はいつまでも色あせることなく目に浮かびます。そして、研修の度に、「児童図書館員養成講座で松岡享子さんにブックトークを教わった際に、こんなことを話されていました」と、前述のお話を受講生の皆さんにお伝えしています。

松岡先生、私達一人ひとりに真摯に向きあって下さって、本当にありがとうございました。全国にたくさんいる教え子達の心に先生から教わったことは、しっかりと届いています。まだまだ時間はかかるかもしれませんが、私達が育つのを楽しみに、見守っててください。先生から教わったことをしっかりと受け継ぎ、次の世代へと伝えていくことを改めてここに誓います。



ブックトーク研修後の松岡享子さんと筆者



### 松岡享子先生のこと

前原 有美子(福山市中央図書館) 第 18 期 1998 年

毎月 1 回、地元のラジオで時節に合った本を紹介しています。2 月は前月に亡くなられた松岡享子先生の翻訳デビュー作『しろいうさぎとくろいうさぎ』を紹介し、松岡先生が児童図書館員の育成に尽力されたことなどを話しました。その数日後にこの追悼集への寄稿のお話をいただき、拙い文章ですが思い出を記させてもらうことにしました。

私が松岡先生と直接お会いしたのは、1998 年度の「第 18 回児童図書館員養成講座」のブック

ークの授業でした。当時、私は図書館員になって10年目、児童担当は移動図書館担当を含めて4年目という、「児童の業務は浅く一通りはした」という状況でした。

授業では、松岡先生と受講生の前で考えてきたブックトークを一人ずつ披露しました。私は「あな」というテーマで、「ほらあな」や「落とし穴」などの出てくる本を紹介するプログラムでした。導入で「今日は『あな』のお話をします。みんなはどんな『あな』を知っているかな？」と問いかけたところ、聞き手から「はなのあな」という声が返ってきました。しかし、私はそれに対して、良い返しがありませんでした。実はプログラムの中で一番盛り上げる本として『はなのあなのはなし』を用意していたからです。うやむやのままブックトークを終え、松岡先生から講評していただきましたが、やはり、「なぜ聞き手の声を受け止めなかったのか」との指摘がありました。このプログラムは、実際に何度も学校で行っていたものだったので、いつの間にか慣れてしまい、「順番を変えたくない」「シナリオどおり進めたい」という思いが優先し、聞き手を置き去りにしていたと深く反省しました。

翌日、一人ひとりに松岡先生手書きの「ブックトークの評価」を頂きました。少々落ち込んでいた私ですが、全体評価欄に「元気がよくて良かった」と書いていただき、目の前が明るくなったことを覚えています。

授業の中で松岡先生は、「ブックトークはパーソナリティが反映され、子どもが紹介者に親近感を持ちやすい。技術だけに頼らず、自分が面白いと思った本をわかちあうという思いが根底にあれば良い。」と言われました。当時を振り返ると、この時に「元気がよくて良かった」という評価が、私にとって色々な場面での原動力になっていたような気がします。

松岡先生と実際にお会いした時間はほんの少しですが、その後の図書館員生活を支える柱の一つを頂いたひと時だったと思います。竹内哲先生に続き松岡先生の訃報を聞いたときは、「一つの時代が終わった」という空虚感しかありませんでしたが、今回当時を思い出していくうちに、これからは教えていただいたことをしっかりと継承していかなければならないとの思いを強くしました。また、それが松岡先生への感謝そして恩返しになるのだと心に決め、これから図書館を支える若い人たちのために頑張りたいと思います。



「中国のフェアリーテール」をもう一度お聞きしたかったです！

村上 弘美(元・青梅市立図書館) 第26期 2006年

松岡先生は図書館で働く私の道しるべでした。児童図書館員養成講座の講師陣に先生の名があったのも受講した理由の一つでした。思えば、図書館の児童担当になってから、子ども向けに何をどうすればよいかわからない中、先生の著作や機関誌を読んでは「見よう見まね」で児童サービスを行っていました。養成講座で体系的に学んだことは、その後の仕事の基本になりました。

松岡先生の「本の紹介文を書く」の講義では、紹介文を書くことは、よく読み込んで、内容を知り、

読んでもらいたいと思うポイントをとらえる。など課題を事例にわかりやすく教えて頂きました。地域図書館にいた私は、業務の中で本の紹介文を書くことは少なかったですが、講座を受けてからは、図書館だよりに載せるのに、紹介文も心して書くようになりました。

児童サービスの中でもおはなし会は、楽しくて、面白くて、子どもたちの反応が見られて、一番やりがいの感じられるものだと思っています。そしてお話の魅力にハマった私は、東京子ども図書館で松岡先生の2年間のお話の講習会を受講しました。顔をしかめたり、眉間に力を込めていたり、笑ったり、先生がいろんな表情でお話を聞いている。そんな姿が今でもまぶたに浮かびます。

先生が語るお話はどれも楽しく、軽々とおはなしの世界に連れて行ってくれます。中でも「中国のフェアリーテール」ハウスマン作を聞いた時の感動は忘れられません。お話のすばらしさの全てが詰まっている。もう一度お聞きしたかったです。忙しにかまけてないで、もっと先生のおはなし会に出かけていけばよかった。もっと先生のお話を聞きたかったです。と今更ながら思います。

先生の著書「子どもと本」岩波書店には、本がもたらすこと、先生の思い・教えが全て詰まっています。先生から学んだことや自分の経験と照らし合わせながら、何度も読み返しています。

図書館に就職した頃は、先生が言う「図書館員が専門職として認められ、十分な教育と訓練を受け、安定した職場を得て、研修と経験を積み重ねつつ、希望を持って仕事ができる」というような希望がありました。しかし、いつの間にか司書職員が減り、異動で人が入れ替わり、指定管理者制になり、当初の理想はどこへやら。

私が図書館を離れてからもう12年が経ってしまいました。

目の前の子ども達のため、頑張っている図書館職員のため、少しでも役に立ちたい。先生から学んだことを伝えていくことが講座を受けた者の役割。と考え、今は図書館ボランティアとして、お手伝いをさせてもらっています。そして今年の秋、おはなしボランティアグループの活動拠点を開設します。

「中国のフェアリーテール」に出てくる師匠のように、進む道がぶれないように、松岡先生、これからも見守っててください。



## 金の腕

琴寄 紀子(横浜市立図書館) 第27期 2007年

松岡享子さんには3度お目にかかったことがあります。初めてお会いしたのは、1996年7月の夏期おはなし講習会。「小さい子向けの話、創作の話、こわい話、おかしい話」がテーマで、二泊三日の講座でした。二日目の夜のおはなし会で「金の腕」を語ってくださり、最後の一言できゃあきゃあ騒いでしまった私たち受講生に「これは次の『ろうそく』に入れます」と微笑まれ、受講生一同、今度は喜んで大騒ぎ。その様子を語り手の椅子から嬉しそうに眺めていらしたお顔をよく覚えてい



ます。

2回目にお会いしたのは1998年11月13日。当時勤務していた横浜市中央図書館で、図書館報「横浜」の特集記事「翻訳絵本の読み比べを楽しむ」でインタビューをお願いしました。新しくなったばかりの東京子ども図書館にお邪魔し、訳書「ペニーさん」(徳間書店)が6月に出版されたばかりだったので、翻訳のときに気をつけていらっしやることなどを伺って、文章の校正などで何度かやり取りさせていただきました。子どもの本を訳す他の翻訳者と自分が違うところは、声に出して読むことを前提としているとおっしゃったのが印象的でした。

最後にお会いするのが児童図書館員養成講座(平成19年・第27期)です。緊張する私たちにあの魅力的な笑顔を向け、3つの問いを出されました。児童図書館員として一番大切にしたいものは何か、それを達成するために今邪魔になっているものは何か、そして、にもかかわらず明日からできることは何か。講義の中で繰り返し言われたのは、選書の大切さです。100年前の本を今読んで共感できるということは、100年後の世界について思いを巡らせることができるということ。想像力をはぐくみ、子どもの心を豊かにする。それができるのが本であり、おはなしである。児童図書館員はその手助けができるのだ、と。

こうやって思い出してみると、2回目にお会いした時が一番近くでお話を聞けたのですが、印象に残っているのは初めてにお会いした時です。この話には続きがあります。この夏期おはなし講習会の期間中か、直前であったか、松岡先生のお母さまが亡くなられていたことを後で知りました。そのようなことは微塵も感じさせず、60名もの聞き手を言葉だけであの暗い部屋に連れていき、たった一言で明るい会場に解き放つ。あの時、松岡さんは、聞き手の一人一人と「おはなし」で繋がっていました。そこにはお母さまへの思いや悲しみなどの感情は一切なく、ただおはなしを手渡すだけの、一人の語り手がいました。



## 養成講座の思い出

浅沼 さゆ子(都立多摩図書館) 第28期 2008年

私が松岡さんの講義を受講したのは2008年です。講義のタイトルは「子どもの文学の基本としての昔話」、会場は東京子ども図書館でした。

先輩からは、折りに触れて松岡さんが偉大な方であると聞いており、その頃、私が抱いていた松岡さんのイメージは、理路整然とした、少し近寄りたがい方というものでした。また、松岡さんの講義タイトルと事前課題だけが、遅れて6月に提示されたので、やはり特別な方なのだと思いに力が入りました。

講義の当日、初めて松岡さんと対面しました。事前課題の一つに「昔話と聞いてすぐに思い浮かべるお話、子どものときに聞いて(読んで)深く印象に残っているお話等の思い出を、当日発表でき

るようメモしておくこと」という課題があり、その準備メモを見ながらの私の拙い発表を、松岡さんは微笑みながら相槌を打ち、頷き、こちらの目をじっと見て聞いてくれました。こんなに話をよく聞いてくださる方なのかと驚き、安心感を得たことを覚えています。更に、昔話に関するお話を聞きながら、松岡さんの温かさは、その深い知識と、ご自身のあらゆる経験をも踏まえた強い信念に基づく温かさなのでは、とも感じました。

今回、当時の講座資料のファイルも紐解きましたが、松岡さんの講義の資料は目立って少ないのです。講義では、私たちのディスカッションではメモをとらないとも言われて、とにかく聞くことに専念していたようで、自分が書いた記録はほとんどありません。ただ、次のようなメモが残っています。「お話をたくさん聞く。→生きていくパターンをたくさん受け入れる。乗り越える力、生きる力を蓄えていく。心にバウンドする力(やわらかさ)を育てる。」恐らく、書かずにはいらなかった言葉だったのでしょう。今も、図書館で児童サービスを行うにあたっては、お話の力・子供の生きる力を信じてサービスしていこうと、自分自身にも担当職員にも言っています。

都立多摩図書館は、松岡さんからずっと支援をいただけてきました。当館主催の研修に対しては、都立の役割にご理解を示していただき、毎年、東京子ども図書館の方を講師として派遣してくれました。講演もしていただきました。当初の開催日は、大雪のため中止となってしまいましたが、その後、すぐに松岡さんから「やりましょう。」と声を掛けていただき、数か月後に無事開催することができました。参加者の期待を無にしていけないという思いが熱く感じられたエピソードです。

松岡さんは、私のような養成講座の受講生も含めて、後輩の児童図書館員たちの知識や経験、置かれた立場等様々なことが心配だったのではないのでしょうか。だからこそ、皆に温かく、数々の依頼に全力で取り組み、伝えてくださったのでは、と思います。本当にありがとうございました。

News Letter no.29 ニュース・レター

編集:鹿野詩乃、高橋樹一郎

発行者:島 弘

発行:日本図書館協会児童青少年委員会

発行日:2022年7月17日

日本図書館協会児童青少年委員会事務局 川下美佐子

Tel.03-3523-0816/Fax.03-3523-0841

E-mail: jidou@jla.or.jp